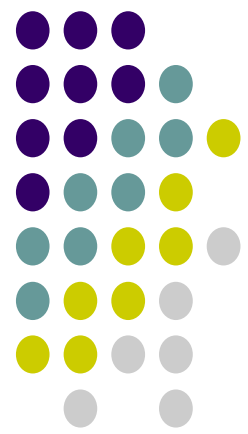




フェローシップ・ニュース NO.23



尾田、ドラッグ・コート会議に行く！

事務局長 尾田真言

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2007年7月1日

私はアメリカのドラッグ・コートの最新情報を入手するために、毎年1回アメリカで開催されている、NADCP（全米ドラッグ・コート専門家協会）のトレーニング・カンファレンスに、平成15(2003)年から毎年参加しています。

全米ドラッグ・コート専門家協会（National Association of Drug Court Professionals、以下NADCPという）は、1989年のマイアミでのドラッグ・コート創設から5年経過した1994年に設立された大規模な非営利団体であり、ドラッグ・コートの実務家（裁判官、検察官、弁護士、保護観察官、ケースワーカー、カウンセラー、TCや薬物依存症リハビリ施設などのトリートメント・プロバイダーのスタッフ等）と関連団体（自助グループ、薬物検査キット製造業者、出版社等）がメンバーになっています。NADCPの活動目標は、ドラッグ・コートを発展させ、資金援助を行い、最新情報を提供し、相互に情報交換しあうことです。NADCPは1995年から毎年トレーニング・カンファレンス（年次研修会議）を開催し、ドラッグ・コートの担い手たちに、ドラッグ・コートをめぐる諸問題についての最新情報を提供し、参加者を教育しています。

このトレーニング・カンファレンスに出席して感じたことは、このカンファレンス自体が、NADCPとしての統一した見解を関係者に周知徹底する場として機能しているのではないかということです。出席者のほとんどがドラッグ・コート業務に携わる実務家であり、実践的な知識を得て日々の業務に役立てようと研修に来ているという雰囲気がありました。研究者が議論を戦わせる学会とは異なり、講師がレクチャーするという形式のセッションがほとんどでした。

今年は、平成19(2007)年6月13日(水)から4日間、第13回のトレーニング・カンファレンスがアメリカの首都、ワシントンDCで開催されました。今年のテーマは、「ドラッグ・コートをさらに推進しよう！」(TAKING DRUG COURTS TO SCALE)でした。今年が例年と最も異なっていたのは、ドラッグ・コートの終了者が何人が参加していて、2,000人が参加する非常に大きなセッションから、10数人が参加する小さなセッションまで、いろいろなセッションにおいて、自らの体験談を語っていたことです。

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

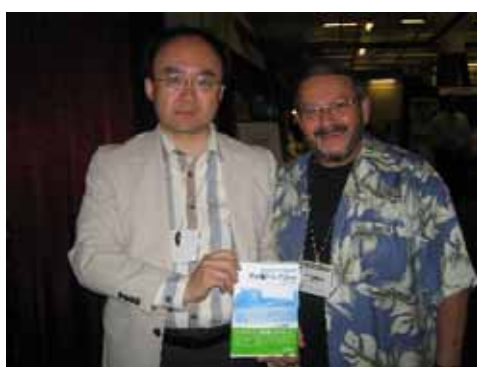
尾田、ドラッグ・コート会議に行く！… 尾田真言	1
1,2のサンフランシスコ…小田晶彦	3
アウェイクニング・ハウスでの日々	5
入寮者からのメッセージ：リョウスケ	6
セミナー・ワークショップのお知らせ 総会のご案内	7
アパリからのお知らせ	8

<6/14(木) 2日目>

カンファレンス会場では、毎朝、展示ブースの一角で、コーヒー、パン、フルーツが提供される大きな部屋が用意されています。そこに何百人もの人が立ち寄るのです。朝8時頃会場に到着して、そこでコーヒーを持って歩いていたら、ロジネック判事を見かけました。『日本版ドラッグ・コート 処罰から治療へ』を持ってきていたので、すぐにそれを献本しました。マイアミ・ドラッグ・コートが出ている106頁を示すと、「日本の書籍に私のドラッグ・コートが出ている」と大変喜んでくれました。裁判官名、裁判所名、住所、URLは英語表記ですから、自分が出ていることがわかったのでしょう。

今年の4月15日(日)のマイアミ・ヘラルドという新聞で、ロジネック判事のかかえるドラッグ・コート参加者数が2,200人になってしまい、今年の8月まで新規の受け入れを停止することになったことを知りました。そのことについて、ロジネック判事に、8月まで薬物事犯者に対してどうするのかと聞いたところ、残念だけれどもジェイル（刑務所）に入れる他ないとのことでした。それから翌日の夜は、ジョージタウンに食事に行くから一緒に行かないかと誘われました。ここ数年、毎年1回はNADCPで会って、一緒に食事をしていきます。

毎年、トレーニング・カンファレンスの会場では、トリートメント・プロバイダーや関連製品の販売業者等の計50社が大きな



マイアミのロジネック判事とともに。本を献本しました。



N.Y.ブルックリンのフェルディナンド判事とともに



薬物検査キットの業者の人と

ワシントンの市内
国会議事堂前での集会風景ロジネック判事に誘われてマイ
アミのドラッグ・コートチーム
と夕食

部屋にブースを出して、まるで見本市のような感じになっています。

今年は、即決裁判で単純執行猶予になった覚せい剤事犯者の中から希望者を募って、毎週1回、アパリで薬物検査を実施するとともに、日本ダルクでミーティングに参加するという警察庁のモデル事業が実施される予定です。それに向けて、唾液検査キットを入手するルートを開発する必要があるのですが、以前から目をつけていた製品の業者がブースを出していたので、購入するための交渉をし、いくつかサンプルももらってきました。薬物検査キットについては、今年からは、製造業者だけでなく、販売代理店もブースを出していたので、中には、同じ製品が別のブースでも展示されていて、価格も微妙に違っていました。

ひととおり、ブースを見てから、カンファレンス会場に移動して、ドラッグ・コートの卒業生と判事が交互に簡単なスピーチをしているセッションに参加しました。プログラム集には名前が出ていなかったのですが、同じく平成15(2003)年の11月に訪問したニューヨークのブルックリン・トリートメント・コートのフェルディナンド判事が壇上で、「私は今日ここに来るまで、卒業生の人たちがこのカンファレンスに参加していることは知らなかったが、とてもうれしく思う。裁判官になって最初の10年間は薬物事犯者をジェイルに送るだけで、二度と私の前には来ないようにと送り出していたのに、ドラッグ・コートが始まってからは、卒業生と街で会えば挨拶をしたりするようになり、薬物依存からの回復を信じられるようになってきた。」といった話をしていました。NADCPのトレーニング・カンファレンスは毎年、2~3,000人もの関係者が集う場所で、その中で会いたいと思う人に会えるのはなかなか大変なことだと思うのですが、この判事とも、ほとんど毎年会っています。このセッションが終了した後に開催された昼食会は、それこそ2,000人以上が入る大きな宴会場でアルコール抜きで、なぜか毎年、チキン料理のフルコースが提供されるのですが、この会場の一番後ろから、前に向かって、フェルディナンド判事を探して歩いて行ったところ、数分で、真ん中あたりに一人で座っているのを見つけられました。会った瞬間に、「あなたのことは覚えているわよ」と言われました。「先月、日本でドラッグ・コートの本を出版しました。私も著者の一人です」と言ってあらかじめ、サインをしておいた『日本版ドラッグ・コート』を献本して、ブルックリン・トリートメント・コートが出ている102頁を開いて見せたところ、彼女も大変驚き、そして喜んでくれました。

そして、一番前の方まで行った所で、なぜか、DWI (driving while impaired) コートと呼ばれる飲酒運転者を対象とする裁判所にプログラムを提供している業者のために用意されていたテーブルが空いていて、その代表に話しかけられ、招かれました。これは毎年感じるのですが、概して、NADCPの参加者は、皆さん大変フレンドリーです。

飲酒運転対策について、一言付け加えておきますが、日本でも近年、飲酒運転が重大な社会問題となっています。しかし、危険運転致死罪の創設等、ただ重罰化するだけではなく、飲酒運転をしないで済むようにアルコール依存症治療を義務付ける制度を創設していくべきだと思います。

食事が終わって、午後6時から、チャーター・バスを何台も連ねて、国会議事堂に移動しました。この日は、自分の知り合いの国会議員のところからドラッグ・コートに予算をつけるように陳情に行き、夕方6時から、国会議事堂前で集会を開こうという催しがあったのです。バスを待つ列に並んでいたら、私のネームプレートを見た、ある参加者の一人から、「お前は本当に日本から来ているのか。何、日本にはドラッグ・コートがないんだって。それなのに、なぜこんなところまで来ているのか」と聞かれたので、「私は刑事政策の研究者で、米国のドラッグ・コート制度に関心があるから情報収集のために来ています」と答えたところ、笑われたこともありました。私が首から提げていたIDカードには、Tokyo JAPANと書かれていたので、日本人だということはわかって、まさか本当に東京から来ているとは思っていない人が多かったようです。バスに乗ってからも、珍しかったのか、いろいろと隣の人から話しかけられました。

国会議事堂近くでバスを降ろされてから、4時間くらい空き時間があつたので、徒歩で、ワシントン記念館を往復しました。10km以上あったようです。万歩計で確認したら、この日1日で2万8千歩歩いています。疲れ果てて、この日は夜ホテルに帰ってから、すぐに寝てしまいました。

<6/15(金)3日目>

この日も朝から、地下鉄に乗り会場に向かいました。「マスメディアにおけるドラッグ・コートと回復」というセッションに参加しました。ここではマスメディアで報道されたドラッグ・コートのビデオを抜粋して上映しながら解説する、大きなセッションに参加しました。もうひとつ、薬物検査キットの使い方についてのセッションに参加してから、一度ホテルに戻ったのですが、突然5時半ころロジネック判事から電話が入り、「今どこにいる？ 予定変更があつて、6時に出発することになったから」と言われてしまいました。ちょうど極限状態の睡魔に襲われて爆睡してしまうところだったので、電話が入って本当に良かったと思いました。あわててタクシーに乗って会場のホテルに戻り、そこからマイアミ・ドラッグ・コートの一行と3台のタクシーに分乗して、イタリア料理店に向かいました。スタッフは総勢10名くらいだったと思います。ロジネック判事に、「今まで日本に来たドラッグ・コート判事はペギー・ホラ判事(現在は退職)だけです。彼女は4年前に日本に来て東京、大阪、京都で講演しました。私は、是非、ロジネック判事にも日本で講演してもらいたいのですが」と言ったところ、「私一人で行くのではなく、マイアミ・ドラッグ・コートのチームとして招待してもらえよう、東京の弁護士会に話を持っていってほしいか」と言われました。マイアミは1989年に最初のドラッグ・コートが創設された場所です。ロジネック判事はマイアミで2代目のドラッグ・コート判事です。帰国後に来たメールでは、日本国政府に話をつけてくれと書いてありました。この話を実現することを期待します。

「1・2のサンフランシスコ」

独立行政法人国立病院機構下総精神医療センター
精神科医長 小田 晶彦

こんにちは。わたしは現在アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市にあるカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校（UCSF）の精神科に留学中です。今回は、サンフランシスコ市内で、もっとも貧困層が多いテンダーロイン地区での薬物乱用対策について報告します。

テンダーロイン地区は、ダウンタウンの中心にあるユニオンスクエアから西にわずか2ブロック隔てたところから始まり、東西に6ブロック、南北に12ブロックほどに区切られた地域です。ユニオンスクエア側から歩くと、まずTheater District（劇場地区）という劇場や高級ホテルが密集する地域があり、ここは白人、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系を問わず、全体に裕福そうな人が歩いています。サンフランシスコ名物のケーブルカーも走っており、国内外から来る観光客もこの地域に多く宿泊しています。映画に出てくるような細長いリムジンも良く見かけます。それがわずかに2ブロックはなれると、道路1本を挟んで反対側はまったく異質の世界が広がっています。明らかにアフリカ系アメリカ人の比率が多くなります。平日の日中から何人かがかたまって大声で話しをしているので、なにやら物騒な雰囲気です。白人もホームレスのような汚れた身なりの人が目につきます。道路は汚れていて、ごみが散乱し、そのわきでホームレスが寝ていたりします。また路上で注射を打っている人も良くみかけます。低所得者用の安い住宅や雑貨屋、マッサージパーラーなどが目立ちます。ここはドラッグ絡みの犯罪が多く、治安が悪いので観光客はまず立ち寄りません。サンフランシスコに住むアメリカ人ですら近寄りたがらない場所なのです。

テンダーロイン地区の地名の由来はいくつかあります。ニューヨークにある犯罪の多い同名の地域からとったという説もあるし、ここに赴任してきた役人が危険手当をたくさんもらうようになって高級なテンダーロインステーキを食べられるようになったからというような話もあります。あとは売春婦が多いことから、テンダー（柔らかい）ロイン（腰や生殖器の意）と名づけられたなどという説もあります。人口70万人ほどのサンフランシスコ市内にホームレスが1万人以上もいると言われており、その多くがこのテンダーロイン地区に集まってきています。というのはこの地域はこれらの人たちを対象としたサービスが充実しているからです。

このテンダーロイン地区で、おもにHIV陽性者を対象とした医療・福祉サービスをしている場所が何ヶ所もあり、わたしはそのうちの2つに週1回ずつ通っています。Tenderloin AIDS Resource Center (TARC)とTenderloin Self Help Centerです。UCSF精神科の活動とは直接関係ないのですが、知り合いのアフリカ系アメリカ人のカウンセラーに誘われて、関わるようになりました。わたしはここで薬物乱用問題がある人へのグループミーティングに参加しています。どちらも断薬を目指したTotal Abstinentのグループではなく、薬物乱用に基づくリスクを減らすことを目指したハームリダクション・グループです。だいたい毎回7～8人くらい集まります。平均年齢はここでも40歳以上です。人種はアフリカ系アメリカ人と白人が半々くらいで、ほとんどが男性です。男性から女性に性転換したトランスジェンダーも加わっていることがあります。前回報告したUCSFのハームリダクション・グループとの違いは、こちらはドロップインスタイルを取っていることです。したがってスクリーニングもオリエンテーションもなく、いきなりはじめての人がグループに入ってくる場合があります。実際にグループミーティングの前に、建物の前を出て「ハームリダクション・グループを始めますよ」と参加を呼びかけています。この近辺を歩いている人で薬物乱用問題がない人はまずいないそうです。またUCSFのグループと比較してこちらのほうが合併精神疾患が重いクライアントが多いようです。統合失調症や分裂感情障害、双極性感情障害、PTSD、性同一性障害などさまざまです。退役軍人でクラックの乱用をしている者もいれば、ヘリコプターの事故で唯一生き残ったPTSDのヘロイン乱用者、母子感染でHIVに感染し、その母親もヘロインのオーバードーズで失った者、迫害を受けてきたトランスジェンダーなど、心の傷が一段と深いようです。

ミーティングはカウンセラーが司会進行をします。かなり自由気ままな雰囲気です。中途参加も途中退室も可能です。頻りに立ち上がってはコーヒーを入れたり、菓子を取ったりしている者もいるので当初は気になってなかなか話に集中しにくかったものです。同じハームリダクションのグループミーティングでも、UCSFのほうは「トリガー」とか「コーピング・ストラテジー」など概ねテーマを決めて話しあっていますが、こちらはその日クライアントが特に気になっていることを自由に話しあっています。中には突然立ち上がって「用事を思い出した。また来る」と言って出て行ってしまったりする人もいます。カウンセラーの話では、途中退室してしまう人は、たいていは深いトラウマがあり、他のクライアントの話に耐えられなくなって出て行ってしまふのだそうです。そういう人には無理にその場にさせず、あとで個別に話を聞くようにしています。

サンフランシスコに留学している小田晶彦先生に、依存症治療の最前線や、サンフランシスコでの暮らしぶりをレポートしていただく第2弾です。



SFのヒスパニックのカーニバルで、ネイティブ・アメリカンのダンス

また、他のクライアントに全く関わろうとせず、一人黙っている者もいますが、それも無理に話をさせることはありません。Isolation = 孤立は、従来は依存症特有の行動パターンだと考えられていましたが、ハームリダクションのグループミーティングでは、「孤立」も治癒の過程であると理解します。

合併する精神症状のために他者と自由にコミュニケーションをとることができないクライアントには、治療的な雰囲気の中で守られ、他のクライアントが少しずつ自己を開放して回復していく姿を見せることだけでも治療的であると考えます。いずれは本人も安心して自己を開放していくようになるわけです。実際に参加者の何人かはこのグループに来るようになってから、徐々に薬物の使用が減ったり、断薬するようになったりしています。貧しい薬物乱用者はこの地域に住み、たとえ断薬を決意しても、家賃が高い他の地域に移ることはできません。多くは「ホテル」という低所得者用の住居に住んでいますが、他の部屋から大麻のにおいがしてきたり、外に出れば路上でクラックパイプを回していたりするような環境で薬物を止め続けるのは非常に困難です。精神症状が悪い時は、部屋から外に出ず、ひたすらうちにこもって耐え続けるそうです。そのような人たちには、敷居の低いドロップインスタイルのハームリダクション・グループが必要です。たとえ生きている間に完全な断薬にたどりつかなくても、安心して人と交流できる場所が必要なのです。

このようなハームリダクションのグループミーティングはハームリダクション・サイコセラピーという薬物依存への新たなアプローチから生まれました。薬物依存を病気と考える従来の考え方との違いをまとめてみます。従来は、薬物依存症は治療不可能な病気で、依存症になった者は、使用をコントロールすることができず、完全な禁欲こそが回復にいたる唯一の方法だと考えられていました。また依存症者には問題を否認する傾向があり、治療に対する動機付けが低いので、まず否認を打破することが治療の鍵であると考えられました。

ハームリダクション・サイコセラピーでは、人は成長の過程で困難な状況を乗り越えるため、あるいは外傷的な体験を癒すためなど、個々のさまざまな背景から依存にいたったと考えます。そこで背景の症状に対して、グループミーティングやカウンセリング、薬物療法で治療をおこないながら、依存の問題については身体的・精神的に危険が多い薬物の使用から、より安全な薬物の使用法へあるいは完全な禁欲へと段階的に変えて行くよう奨められます。また薬物乱用者に否認が多くみられるとは考えません。多くの薬物乱用者は薬物使用によってもたらされた問題の多くを内心は自覚しているのですが、薬物使用によって一時的に解決してきた内的な問題もたくさんあり、心の中で「やめたい気持ち」と「やめたくない気持ち」が戦っています。動機の定まらない不安定な状態の時に、家族や周囲の援助職から性急に完全な禁欲を求められたり、本人なりにリスクを減らそうと努力している時に「無力であること」を強調されると反発し、治療に対する抵抗が生まれます。こうなると治療が非常に難しくなるので、さらに強力で断薬をすすめるか、本人の状態が非常に悪くなり＝「底つき」して本人が治療を受ける気になるのを待つこととなります。例えば旧来の治療共同体では入寮者にアタックセラピーといった攻撃的な治療法や、屈辱的な懲罰を加え、これを否認の打破と称していましたが、結果的にトラウマのある入寮者をさらに傷つけ、治療から遠ざけることにつながったようです。その反省から現在サンフランシスコではウォールデンハウスのような伝統的な治療共同体でも、アタックセラピーは止めたそうです。ハームリダクションのグループセラピーでは、カウンセラーは本人の葛藤に耳を傾け、過去の薬物使用が本人のどのような苦しみを和らげてきたのか理解し、また同時にどのような問題が生じたのかを洞察させ、現実的に達成可能な目標を立てて少しずつ前進することを奨めます。

ハームリダクションは本来HIVの感染拡大を防ぐという目的から生まれましたが、そこに合併精神症状への理解も加わって、薬物依存に対するより人間的なアプローチへと変わっていきました。従来のように依存を単一の疾患としてみる見方だけでは個々の事情は無視されやすく、安易に「否認」というレッテルを貼られることがあります。またアルコール、覚せい剤、大麻などそれぞれの特徴を考慮せず、すべてを一緒くたに考えがちですが、現実には依存する薬物の種類によってあらわれる症状も人格に及ぼす影響も大きく異なります。ハームリダクション・サイコセラピーでは、一つの理論の中に人を押し込めようとするのではなく、それぞれが生きてきた軌跡に敬意を払いつつ、個別の解決法を考えることを重視します。もっともこれは既成の権威に対する反発と自由を求める気風の強いサンフランシスコのような土地でこそ受け入れられた手法で、アメリカ合衆国の大半の地域は禁欲的なキリスト教の影響が強いため、そのような土地ではハームリダクションに対する反発もあるようです。アメリカ合衆国の中でも特に非白人種の多いサンフランシスコは、他の人種に対する理解が深く、人種偏見も少ないようです。知人の医師は患者にヒスパニック系アメリカ人が多いので、スペイン語を勉強しています。東洋の文化に対する憧れが強く、ヨガや合気道がブームです。そして日本語を勉強しているアメリカ人もたくさんいます。アメリカ合衆国全体でも非白人種の人口が1億人を超えました。イラク戦争開戦当時は、一時的に大きく保守的な方向に向かいましたが、今では多くのアメリカ人がこの戦争は間違っていたと考えています。アメリカが今後も違いを乗り越え、お互いを理解しあうような方向に向かえば、ハームリダクション・サイコセラピーも徐々に受け入れられていくと思います。



TARCのスタッフ
右が筆者



Tenderloin Self Help
Center

アウェイクニングハウスでの日々。。。

アウェイクニングハウスでは日々どのような暮らしをしているのか、写真で綴ってみました。現在、25人の入寮者と5人のスタッフがここで暮らしています。



犬係：犬の世話を担当しています。犬小屋も作りました。



朝の掃除：毎朝20分かけて施設の掃除を全員で行っています。



パン係：みんなの朝食を用意します。



食事当番：昼と夜、各グループに分かれ、自分たちの食事を作ります。



食堂係：食堂の備品の補充や清掃を担当します。



コーヒー係：仲間たちが飲むコーヒーを作り、管理します。



ミーティング風景：午前と午後の1日2回ミーティングが行われます。



太鼓練習風景：毎日昼食後30分ずつ、琉球太鼓の練習をしています。



水道係：施設の水道の調整・管理をします。



花係：施設内外の草花のお世話をします。



掃除係：朝の掃除以外で施設内全般の清掃及び掃除道具の管理をします。



ボイラー係：ボイラーの管理は施設ではとても重要な役割です。



食堂の修繕：左官経験のある仲間が手伝ってくれています。



事務所の改装：お金はなくても自分たちで出来ることは全てやっています。



レクリエーション：月に1度みんなで食べ放題や温泉に行きます。

山本施設長が就任して約10ヶ月が経ちました。施設での暮らしを安全で快適なものにするため、建物の点検や修繕に取り組み、また琉球太鼓をプログラムに取り入れ、それぞれの人に役割を与えるなどいろいろ工夫を凝らしています。

食事当番以外に約10の係があり、1人に1~2つの役割が与えられています。

野外プログラムとしてソフトボール、夏には川遊びや河原でのミーティングが行われます。

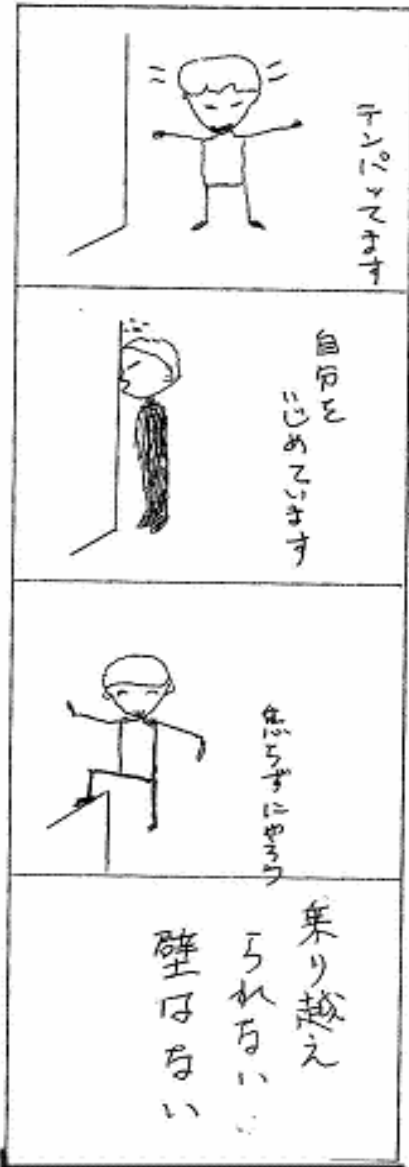
自由時間に川に釣りに行くこともできます。自分なりに自由な時間を楽しんでいます。

群馬県藤岡市の標高700mのところに施設はあります。豊かな自然に恵まれ、近くには湧き水もあり、地元では名水として知られています。車で15分のところの川べりに露天風呂付の温泉施設もあります。

サムの なんちゃってアニメ劇場

(略してNA劇場)

「焦らずにやろう！」



「薬物依存」 DVD販売中！

アパリが作成したDVDで本人の体験談や、近藤恒夫の話が約30分間収められています。学校での薬物乱用防止教育、行政の職員の研修で利用されています。

1枚 3,000円

FAX : 03-5830-1791
メール: info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

アウェイニングハウスの入寮者からのメッセージ

「今までの自分の人生を振り返って」

リョウスケ

僕は去年の12月に入寮した薬物依存のリョウスケです。まず初めに使用した薬物は大麻でした。それは僕がまだ10代のころです。僕は音楽好きで音楽活動をしていました。遊ぶ時には大麻が無くては面白くなっていき、家に居る時はあればあるだけやって、はまっていました。週末は毎週のようにクラブへ行っていました。その生活がずっと続いていました。その後、高校を卒業しました。

僕には借金がありました。友達にお金を借りたり、親からお金をもらい仕事も長くは続かなく、高校を卒業したその年の12月にバットトリップに入りどうしようもなくなり、なぜか外科に連れて行かれて、それから色々な病院を転々とした僕は「手首」を切りました。そしてまた病院に連れて行かれました。

それからの僕はガスも吸うようになりました。病院で処方されたクスリも大量に飲みました。いつの間にか僕は自殺しようとしていました。一番ひどく今でも後悔してることは、父親と母親や兄弟を木製のバットで殴ってしまったことです。その事がありました、病院に通院することになりました。通院していた病院で処方される精神薬に僕は良いイメージがなかったので飲むのが嫌でした。だから僕はクスリを飲んでるふりをして吐いて捨てていました。通院して3ヶ月位してから、また大麻を吸い始めました。大麻を吸いながらアルバイトをしていました。しかしせっかく始めたアルバイトも、すぐに辞めてしまい今度は金融会社からお金を借りて、家に引きこもりました。ずっといろいろな事を考えながら引きこもりました。

半年後、また大麻を吸おうと思い、売人の所に行きました。しかし売人が大麻は無いといいました。それで初めて覚せい剤や、エクスタシーをやりました。大麻以外のクスリを使うようになってすぐに警察に捕まりました。そしてよくわからない状態で病院に入院させられました。入院は1ヶ月と短かったけど今度は違う病院へ通院し始めました。今度もまた病院で処方されたクスリは飲まないでいました。最初のほうに書いた借金の事です。すべて祖父に返してもらいました。そして、またアルバイトを始めました。しかし祖父に返してもらったのにもかかわらず、また金融会社からお金を借りてしまいました。それからアルバイトをやめて家に引きこもりました。家の中で大麻をずっと吸っていました。

そんなある日、突然警察が家に逮捕状を持ってきました。それで去年の12月に日本ダルク アウェイニングハウスに入寮することになりました。僕は毎日3回のミーティングに参加しています。たまにミーティングが嫌になる事もあります。でも施設のプログラムである掃除や、ソフトボールなどは本当に楽しく参加しています。

今でも思い出すのは施設に入寮して1ヶ月目くらいの時、何かに囚われていてソワソワして落ち着きがありませんでした。だから入院する事になりました。入院して変わったことは、今までちゃんと飲めなかった処方薬がちゃんと飲めるようになりました。薬物も使用していません。しかし入寮して4ヶ月目に前橋の自助グループから抜け出して横浜の実家まで帰ったけれど、家には入れてくれずにすぐに父親の運転する車に乗せられて施設に戻ってきました。抜け出した時クスリは使っていないので、今の僕のクリーンタイムは6ヶ月です。こんなに薬物が止まっていることは大麻を吸い始めてから1回もありません。今まで音楽を聴くときは大麻を吸っていないとダメだったのが今はそんなことはなく、楽しく聴いています。

これまで、両親や親戚や友達をさんざん裏切ってきましたが、これから一つ一つ解決していこうと思っています。そして失った物を取り返したいと思っています。

まだまだ先は長いけど、1年間は施設にいてクリーンを続けたいです。

スタッフからひとこと：特に裁判官に働きかけることにより、保護観察付執行猶予をつけてもらえました。判決日に釈放され、すぐに車に乗せ施設に連れて行き入寮となりました。最初は抵抗感が強く、長く続かないのではと心配しましたが、今は落ち着いている様子が伺えます。ご両親も家族教室に参加し、対応について熱心に学ばれているので適切な対応が出来たのではと思います。

<石塚伸一編著『日本版ドラッグ・コート』日本評論社(2007年)p.207参照>

セミナー・ワークショップ開催のお知らせ！

7/21(土)・22(日)共依存ワークショップ 場所:ホープヒル(横浜)

家族の共依存の問題は、頭では分かっているのに、なかなか実行することが難しいようです。本を読むだけではダメで、セミナーなどに参加して繰り返し勉強する必要があります。すでに自分の共依存の問題に取り組んでいる方も、初めての方もこのワークショップを通して、少しでも共依存から抜け出して、自分らしい生き方を身に付けられたらと思います。

[講師]町田政明 [時間]21日13:30~17:30・22日10:00~16:00 [参加費]15,000円

8/5(日)薬物依存症の家族の対応セミナー 場所:アパリ(上野)

薬物依存症の本人を持つ家族が、このセミナーでは依存症について学び正しい知識を得ること、また今お困りの問題について具体的に対応する方法を学びます。その中で家族は希望を見つけることができます。平日の家族教室に参加できない方のご参加をお待ちしております。

[講師]町田政明 [時間]10:00~16:00 [参加費]8,000円(会員6,000円)

8/11(土)・12(日) ACワークショップ 場所:ホープヒル(横浜)

家族教室や個別相談の中から、さまざまな取り組みが必要であると感じました。そんな思いから今回はACの問題を多くの方々と一緒に考え、深めていきたいと思いこのワークショップを開催することにしました。自分のACに気づいた方、援助職の方の参加を心よりお待ちしております。

[講師]町田政明 [時間]11日13:30~17:30・2日10:00~16:00 [参加費]15,000円

8/7(火)8/28(火)依存症と軽度発達障害 場所:Lプラザ(石川町)

ワンデーポート主催、アパリ共催による、依存症と発達障害の勉強会の第2回目を開催することになりました。アルコール・薬物・ギャンブルなど依存の問題の背景に軽度発達障害(アスペルガー症候群やADHD)の問題を抱えている人が少なくないようです。8/7は家族を対象として、8/28は援助職を対象とした内容になっています。

定員は家族向け60名、援助職向け80名です。

お申し込みはワンデーポートまで。

[講師]朝倉新先生 埼玉県立精神医療センター医長

[時間]19:00~21:00 [場所]かながわ労働プラザ(Lプラザ)4階 [参加費]1,000円

依存症と軽度発達障害を併せ持つ人の特徴

- ・依存症になる前から、いじめや引きこもりの問題があった
- ・依存症になる前から、学業や仕事の継続が困難であった
- ・こだわりが強い
- ・依存症になる前から限られた友達と付き合う傾向があった

【お問い合わせ・お申し込み】アパリ：03-5830-1790 ホープヒル：045-364-5289 ワンデーポート：045-303-2621 全て申し込みが必要です。

アパリ会員募集

平成19年4月より新規会員(正会員・賛助会員)を募集いたします。ご入会していただいた方には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お送りします。また、書籍購入の割引や公開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。正会員になられた方の特典は、年に一度開催される総会に参加し、意見を述べるすることができます。

アパリは立ち上げて8年目に入った組織です。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネットワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。APARIに関するご意見ご要望がございましたらいつでもご連絡ください。

【年会費】 正会員：12,000円 賛助会員：6,000円

【期間】 平成19年4月1日~平成20年3月31日まで

総会 開催します！

平成19年7月16日(祝)15時~アパリクリニック上野2階ミーティングルームにおいて総会を開催いたします。正会員の方にはご案内を送らせていただきましたが、ぜひともご出席いただきたくお願い申し上げます。なお、18時30分より同じ会場にて家族教室を開催いたします。ご家族の方は合わせてご出席いただきますようお願い申し上げます。

ロイ神父からのメッセージ DVD付き書籍 販売中！

『仲間になってくれてありがとう』

昨年他界したロイ神父が20年以上にわたりマック・ダルクを通して語ってくれた数々の貴重なメッセージと、彼の“仲間”からの手紙を綴った珠玉の一冊。日本における依存症リハビリ施設の歴史を知り、回復者たちの生の声を聞くことができる総頁数500ページを超える重厚な内容に加えて、ロイ神父のビデオメッセージが収録されたDVD付き。援助職の方、ご家族、当事者などさまざまな立場の方にとって必読のバイブルです。一般の書店ではご購入できません。

定価 3,500円

FAX：03-5830-1791

メール：info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0015
東京都台東区東上野6-21-8
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
メールアドレス：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に13ヶ月

【入寮費】

月額16万円 (初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
(新しくなりました)

<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成19年7月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

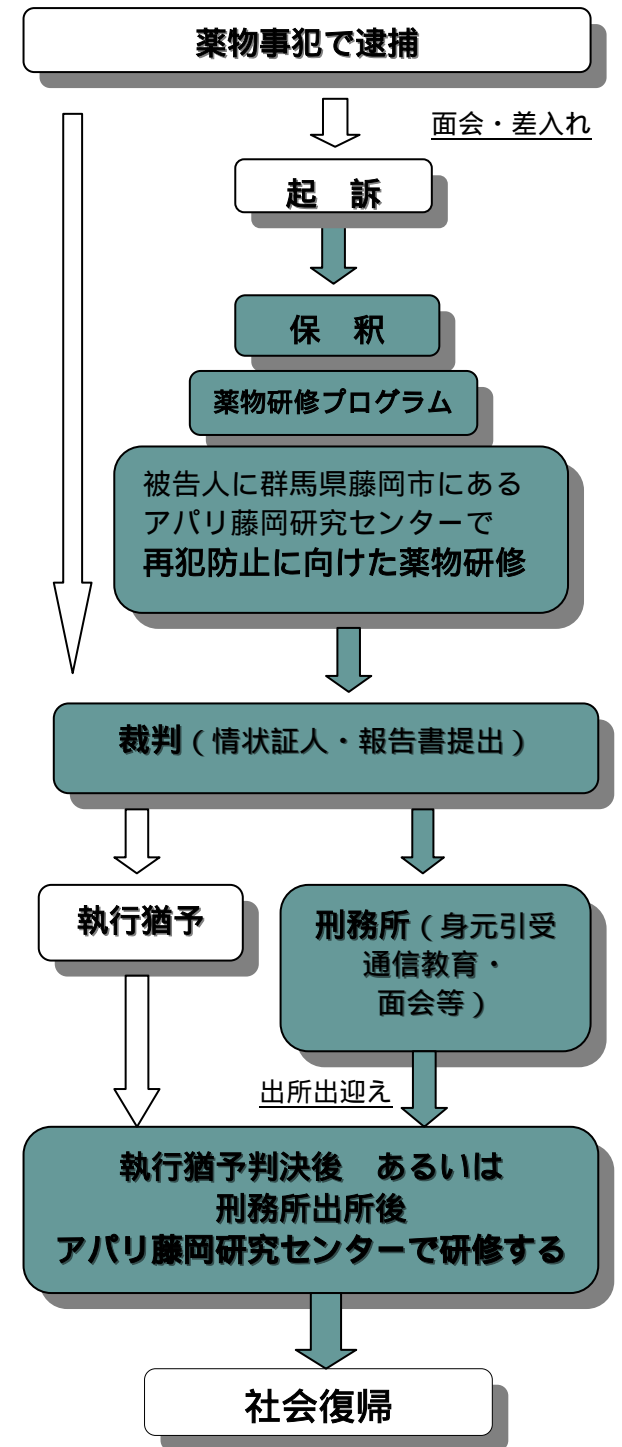
《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもなのまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は5%以下です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<家族教室>

「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」

対象：薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

日時：第1・第3月曜日 18:30 ~ 20:30

場所：アパリ・クリニック 上野2階

参加費：3,000円

【お問合せは東京本部まで】

日付	体験談(30分)	テーマ
7月16日(祝)	古澤清一(アパリ・スタッフ)	ダルクでの20年
8月6日(月)	秋元恵一郎(東京ダルク・スタッフ)	依存症は治るのか? Part2
8月20日(月)	相良聡(川崎ダルク施設長)	出逢い
9月3日(月)	リエコ(女性メンバー)	家族との関係
9月17日(月)	高橋仁(日本ダルク・スタッフ)	家族へのメッセージ

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など。出張カウンセリングは相談の上、実施可能かどうか判断させていただきます。(料金は別途必要)

【費用】45分 9,000円 【場所】アパリ東京本部 501号室

【カウンセラー】町田 政明 [元神奈川立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事] 【予約】電話でお申し込み下さい。03-5830-1790

【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。遅れていらした場合は時間が短くなりますのでご了承ください。